普救類方

1729

普救類方　巻一五欠

八代将軍徳川吉宗ハ幕府医官林良適
丹羽貞機ニ命ジテ山野得易キ薬品ヲ
選ビ以テ僻郷医薬ニ乏シキ村ヲ救済セシガ
注メニコノ書ヲ作クリ上梓シテ諸国ニ頒布
セリ実ニ享保十四年十月(1729)

ヤ 9
1064
1

官刻普救類方

今四海昇平之日兆民鼓腹而樂何慮之有乎所可憂者其唯疾病耳雖然於都下大邑也不乏明醫良藥若夫遠邨窮鄉則反之故每遇沈痾卒忘乃圖境東手而俟其斃焉可悲之甚也

官仁德光被　命刻此書以將使彼疲癃殘疾之徒登于壽域矣誰不仰其慈愍之厚恩澤之深耶實養生之寶訓治療之捷徑也戶戶購求一本而人人要到期頤則庶幾不負此書　官刻之盛意乎請莫為尋常之看矣是所望於吾輩之企望也

享保己酉十一月壬申

79
L064
1
91-1809

普救類方序

嘗聞一身者一國之象也仁德誕敷者
國家之修養也其本亂內潰則陰陽乖
戾雖有善者無如之何矣故曰仁人理
其身猶明君治其國方今
大君幕下體仁繼志當離明之正位司考
文之大權盛舉隆上敎恩垂下彼有餘
粟此有餘布武德廣覃仁政普施誠昇

平餘化而全體大用之謂也雖然天有
熯澇之祲人有末腹惑心之疾司之者
醫而謀之者術也頃日
大君命之彼天祿石渠之書者以爲巨家
之備矣至若邊鄙窮巷乏醫藥者小民
之所患而仁網之所漏也
台意不能无遺感是誠可忍乎忍之可謂
仁乎於是辱

命醫員林良適丹羽正伯點撿　官庫羣
籍搜羅捷方單方撰其至要品味亦四
五許方法不過八九蓋愚家蠢蠢蚩蚩
之徒所易合和而果夫有明效者也錄
以　國字日就月將研編摩之志顯纂
述之功縷分脉剖繕寫甫畢都爲柒策
特敎臣親顯披閱參互索搜則博而不
繁詳而有要眞格物之通籍黎元之祕

錄也目之曰普救類方情狀實當矣普
者何博施民也蓋聖人其猶病諸救者
何能濟衆也王者尚所用心也類者何
格類疢疢印定羣疑也方者何品列捷
方兼備體用也其爲編也按類求名探
本及方皆欲叙病眞濫使夫人易知而
原委處方有所依據也不亦宜哉罔憫
民瘼治身以及天下之餘澤至矣盡矣

嗚呼壽國以壽民不與艸木同朽焉臣
元雖不堪其任恭承
洪命以述
台旨之萬一謹爲之序誠惶頓首以聞蓋
非以不忍人之政而仁覆天下之謂乎
其仁豈易測乎積善餘慶雖萬萬世所
以不可易者信乎哉
享保己酉之五月

從五位下典藥頭式部大輔橘朝臣
親顯謹識

普救類方目録

卷之一

頭之部

頭痛 附眩暈
白禿
頭瘡 一切頭ふかきる腫物をいふ
髪かしれけ
白屑
頭禿 頭ホ淺の大さ拍づくもげるなり
頭面腫 かしらおりてのまれ
頸項 ちりのやまい

面之部

面腫 かをのまれ
粉刺 ゆさび
雀斑 そばかす
解頤 おとがいそびれるなり
頤頰腫 おとがいわうれさま
面瘡 かをの腫物をいふ
眉毛 まゆげ

眼目之部
一切の眼病代るべし
口舌之部
口舌瘡 くちもとされ出来れ
口臭 くちのうちくさきなるも
木舌 ものこうそれく呆こうるなり
舌縮 たこうもぢまる
脣吻之部
脣裂 くちびるの裂けてるなるも
脣腫 くちびるれれ
口吻瘡 くちびるさの出来物
牙齒之部
牙齒痛 はのいたみ
口糜 くちのうちぬぐけ
舌腫 ものれさま
重舌 舌の裏ふくさ舌のやうるるものあるべしるべこもとしてよ
脣瘡 くちびるのあるもの
緊脣 くちびるこびしぐけるなり
附 蠹齒 むしば
齒動搖 はうごく
齒日長 はのびにくい
牙齦
牙齦痛 はぐきいたむ
牙齦痒痛 はぐきかゆいたむ
牙齦腫爛 はぐきされれてるる
走馬牙疳 はぐきつぶれて血出る
熱牙痛 はのよろ歯のいたむなり
一切牙痛 はぐきのされいたみ
取齒方
牙齦腫痛 はぐきされいたむ
牙齦宣露 はぐきの肉こけて歯の根あらはれるなり
牙宣 はぐきより血出る
咽喉之部
咽喉腫痛 のどされいたむ
喉痺 のどけ
纏喉風 喉の内外ともに大に腫れるなり
急喉痺 喉痺勢はげしく急にされふさぐんとする病
帝鍾喉風 咽の内腫て息ふさがんとするなり
懸癰 のどの口の前に腫物あるなり

骨硬　魚の骨なども骨ゆくを一切ろ刺咽ふさぐなり
附 呑錢　呑石　呑銅鐵　金銀入腹　呑釘
呑鍼　呑竹木　呑髮　呑穀芒
咽喉雜症　咽の中もぐくれ痛ふさのぎり刺やぶる
聲　ものいふ聲の高低なると　醋心　酸ある咽ふつきのぎり刺やぶる

耳之部
耳鳴　耳のなると
耳痛　耳いたむ
耳腫　耳のはれ
虫入耳
附 水入耳　水銀入耳
耳出血
耳聾　耳つんぼ
聤耳　耳ただれ
耳瘡　耳の後瘡
耳出汁

鼻之部
鼻塞　鼻ふさがる
鼻中瘜息　鼻の中ふ肉あるを孔ふさぐ
鼻瘡　鼻かれあるもの
鼻淵　鼻ながれる清涕
酒皶鼻　酒くさ鼻

巻之二

心胸之部
心胸痛　むねのいたみ
冷心痛　むねひえいたむ
蟲心痛　虫ありてむねいたむ
胸痹　むねの中つゑ痛もむ寸ちぎるが
心胸雜症　胸のあぐの症をまる
熱心痛　むね熱いたむ
卒心痛　ふいふむねいたむ
痰心痛　痰ありてむねいたむ

腹脇之部
腹痛　はらいたむ
脇痛　わきいたむ
腹脹　はらはる
腋臭　わきが

腰之部
腰痛 こしいたむ
腰腿痛 あしもいたむ
腰脊痛 こしせいたむ
手足之部
手足痛 てあいたむ
轉筋 こむらがり 附霍乱轉筋
脚弱 あしよわし
皮膚之部 附筋骨
一切皮膚筋骨乃表代之事
前陰之部
陰囊
陰門
陰莖
後陰之部
肛門
脫肛
痔漏
小便之部
小便淋 小便ちがうなり
小便澀 小便ちがうなり
淋病
熱淋 小便あつく熱しちがいたむなり
血淋 小便血ふくるちがいたむなり
冷淋 小便赤くぜつ引いたむなり
膏淋 小便膏のごとくこりていたむなり
沙石淋 小便ろうあるあるいたこと甚しき
氣淋 氣にこり淋病となり引いたるものなり
卒患淋 小便卒患淋病なり
小便不通 小便つうぜざるなり
小便頻數 小便ちがうなり
遺溺 小便ちがうなり
大便之部
大便結 大便秘結ちがつて通じがたなり
大便閉 大便ちがつと通ぜざるなり

大小便閉　大便小便ともにつまりぜざるなり
中風
痺症
痛風　手足骨節ともにいたみくるしくあるなり
傷寒
中寒
中熱
霍亂　附交腸痧
感冒
痰飲
欬嗽
肺癰　附肺痿
時疫
中溼
發熱
喘息

巻之三

呃逆
噎食
内傷
諸氣
積聚
飲食傷
痢病
熱痢
赤痢
白痢
膿血痢
久痢
禁口痢
嘔吐
反胃
補益
泄瀉
冷痢
白痢
血痢
氣痢
休息痢
小兒疳痢

痢後雑症　痢後腹のまぐれ症を言ふ

巻之四

瘧疾　おこり
鼓脹　脇よりうちて西ゆびふくれ臭い出せるもの
汗
自汗　汗おのづからいづるなり
汗雑症　汗いづるさまざまの症をもふく
白濁　附赤濁　小便より白水のやうなるもの出なり赤濁は赤くにごりなるなり
消渇　かわきさのやまい
諸蟲　寸白虫の出れ症をもふく
不寐　附多睡　不寐いねられざる多睡は眠りがちなるなり
起居雑症　おきよ雑又いかり怒りの類をもふく
腫氣　むくみ
黄疸　附黄汗　黄疸は黄ぶくれなる病　黄汗は黄病汗出て衣をそめるなり
盜汗　寝なせいづるなり
遺精　紙つくる中に男女精なるなり　目さめる中に精するもあり
疝氣　わかおどろきむなさわぎするあり
驚悸　この又もれ
健忘
勞症　虚労の症なり

癲癇　附狂病　癲癇はてんごうさ狂症いきちがいなり
血症
吐血　血をはくなり
咯血　附鼻血　咯血は血の鼻より出るなり
唾血　つばきにまじりて血いづるなり
衄血　えなかち
尿血　小便より血いづるなり
九竅出血　耳鼻目口舌小二便なり一竅より血いづるなり
卒死　ずつし
客忤　大概途中にて形なきものに心腹後るるごとくいたみ腹腹ちらし乳痛へきしびれ
鬼擊　卒中風脇腹の痛死するなり
厭寐　卒に腹痛いたみ息もとまるごとく性態ずしりとして腹へさしのぶせあり腹をせめるひ死なるなり
尸厥

邪祟 つきものなどのたぐひ
自縊 くびくり
凍死 附倒死 凍死は軟きたるうちで一死するなり まさかの死を一死するなり
溺死 水に溺死するなり

卷之五

瘍瘡門

癰疽
附骨疽 腿の内おもてひい死の色に骨に附く まぼる程なり 筋骨つくいこひろく
癤疽 大概もぐめあるいろ附かさ疱のごとく赤くして或い痒又いたみ熱出るおりくる
疔 面もて小出まるものなり 大概もぐめあるいろ附かさ疱のごとく赤くして或い痒又いたみ熱出るおりくる
瘰癧 并結核 結核は項などにくるまりあるいろいろとつぶ
諸瘻瘡 癰疽瘰癧の類なり 狂犬にかまれたる肉のうちに停り穴穿ち
瘡瘤 ぶと
腫毒 或いは又は赤く腫ひろがり熱し 痛なり
癮疹 皮膚の内に細かるものあり発しあまいかゆきなり風がろせなどにも似る症なり
浸淫瘡 附熱瘡 大概細かるものあり 心にあたりけあて熱ひろがり 痒いものなり 是を浸淫瘡といふ
瘡瘡 附爛瘡 瘡瘡は足に出来 細かるものあり 爛瘡は瘡の数にて出来 爛れてくずれるをいふ
疥癬 ひぜんぐさ
癬瘡 ぢむし
瘭子 あせぶ
代指 ゆびぐさ
嵌甲瘡 附割爪成瘡 嵌甲瘡は爪の肉に嵌りて痛む
踵足諸瘡 足にあるさまざまの腫物なり
癜風 かすみぶ
皴裂 ひびあかぎれの類なり
便毒 ちこ
瘋風 かつえ
痣 かくろ
癰瘡 ちくびがさ
腰瘡 えぐきがさ
疥子 あせぶ
凍瘡 ちもだれ
灸瘡 附鍼瘡 灸瘡は灸のきずなり 鍼瘡は鍼のきずなり
下疳 陰茎の瘡なり
漆瘡 うるしかぶれ
疣目 うをのめ

豌豆瘡　瘡疹のごとくして血ばかりあるものなり
蛇纏瘡　糸ほそくしてまるなる物にて蛇のまとひつるがごとくなりまとひつくるものなり
淫瘡
諸腫物　并雑症
金瘡
箭傷　やじるし
打撲傷　うちつけ
墮傷　ちからをうちこころうて骨をうちくだくをいふ
破傷風　金瘡をくいあやぶりくるる風にあたりなどして傷いたること毒
馬汗入瘡　馬の汗をずのほにいりてこつるきなり
湯火傷　やけど
竹木刺　しけきのもの
諸般惡瘡　ばんぐのわるきもの
蟲獸傷　虫ふさまたげものにかまれたるなどもろる物のふなり
爬傷　かきやぶり

婦人門　卷之六

月水不順
漏下　月水久しくもちでやまざるなり
帶下　こしけ
胎動　腹中にて胎動するなり
臨産　産ふのぞむ時の症をもちいたること
横産　よこざん
死胎　腹のうちにて子死するなり
胞衣　のちざんのこと
血暈　血のくらくして眩暈するなり
乳汁少　乳けすくなくなること
妬乳　乳をとりて猛いたみ苦けて熱をもつなり
經閉　月水通ぜざるなり
崩血　月水ひとしきりおびただしくつること
姙娠諸病　懷胎の内さまざまの症をもちいること
胎漏　懷姙の内月水のごとく血ながれて止まざるなり
難産　一切のなんぎんをもちいること
逆産　さかさまの子
流産　まだ産ずしてせうさんをもいふなり
子腸　附陰腫陰不閉　子腸脱ぬけおちまりいでざるなり
産後雜症　産ふさまざまの症をもちいること
乳汁不通　乳けいでざるなり
吹乳　小児乳をとらざるに寢いりて中の乳をそこなれざるなり

乳頭裂　ちゝびさけやぶれいたむなり　乳核　乳房のうちにかたまりあるを
乳癰　乳わく塞いたくはれて膿湧いづるなり

小兒門
小兒初生　小兒生れしはじめの病症をあつむ　臍腫　附 臍瘡 臍湿 臍突
臍風　臍の帯落る時風湿にあたり口中にこまかなるもの出来乳けをのむことならず
ちゞまり治せざれば命あやうきものなり
撮口　面黄に息づかいあらく舌こはり口を撮あげてなきて啼声も出ざるものなり
鵝口　口中に白き細かなるもの一面にでき口つぐみ啼声もおざるものあり
乳蛾　咽に小さき結核出来治せざれば息ふさぐなり　夜啼　附 腹痛啼 驚啼　よなき
客忤　見なれぬものなどに見ておびゆる　癇症　かんのやまひ
癖疾　小兒腹のまはりにかたまりあるなり　驚風
痘瘡　かうさう　丹毒　熱一身にむらゝと赤く雲のごとくおこり熱さるものなり
赤白遊風　弁 纏蛇丹　丹毒熱ありて出来火のごとく熱し又手をさゞめするうつり纏蛇丹ハ身をまきて蛇のまふごとく出来る物なり
天泡瘡　丹毒据わくかしら白く泡のごとくなるを云
疳瘡　疳の病にて口のうち又ハ鼻のあたりに瘡出来はれいたみ食もあるなり
甜瘡　面あかくやせ小耳はれなどにこまかなる湿瘡出来痒くたゞれはずけいでこちけつき
ところに瘡さかるものなり
小兒雑症　小兒さまざまの病状をあつむ

卷之七
諸藥圖
藥種製法

凡例

一 此書に載るところの諸の薬方幷薬綱目幷に其外の佐ず書の薬方甚多し いづれも平常用ゆるもの一二味或は五味までの方薬品も平常用ゆるものを要に載る

一 病一症に薬方の數十方に及ぶものあり といへども方數多けれバ方用ゆるふゆるざるハしるしき事大概一症より五六方或ハ八九方にとどまる

一 薬剤の分量古方の通りまたくハ尚用ふ便なるべし今用やまとさに載るべし大概古方の量目或酌例して載すべし

一 病症幷に薬名の假名世俗よ淡名にて呼るれるハ漢名或ハ和名を略なれるハ和名を載る次

一 此書にのせる所の方乃中第本草綱目の類世俗常に見おぼへる物幷に唐物ゆて和ふかしものハ図に出さず常

に見おぼえざる病又は大概分知るやうにまぎらはし
き新の病名をつけ号する事なかれ

一種製法つくり用ゆる軟地黄乾姜半夏麹神麹烏梅
皂莢松脂竹瀝煉蜜附子等は製法後段の末にしるすと
凡此書にのせる薬方病名おのおのかるときにより用ゆるの義
別大概をしるしるの病症小しるすに粗文病の
名をもしるすべき病人乃至婦さに達するに醫師の了簡後
うけて用べし

普救類方巻之一上

林良適
丹羽正伯　纂輯

頭之部

頭痛

頭痛に
決明子炒粉末一匁水にてとき大陽に付べし又は決明子
粉に入枕小もくくよし　本草綱目
又方升麻一匁蓮葉一枚水火茶碗に二盃いれ
一盃小茶じつめ合後小のくくよし　彙聚單方
又方細辛香附子川芎各七分づゝ天目に一盃入八分めり
寝さ白小用ゆ　備急良方
又方川芎當帰蒼耳子等分粉末一匁茶さまに茶湯にて
用ゆ　衛生易簡方

又方　羌活防風紅豆等分粉末にして鼻に吹いれてよし　本草綱目

頭痛甚つよく眩暈するに

清水一きぞして二度酒一合いれ七分めに煎じつめ用る　同

又方　大蒜を切て足の脛のうへ赤きもよりの所へ貼てくすべし　同

人の口中いろ〳〵大蒜の臭いづるまで貼てくすべし　同

又方　杏仁皮と米とを紙に研つぶし水をいれ薬じつめて付を

赤ぶくれのうへ粥の内に入て食すべし　同

又方　烏梅三十箇ばかり紙にうつし塩少ばかりいれ酒七合にて煮

て二合半に薬じつめ赤きうへに熱痰を吐出して飲べし　同

又方　全蝎二十一蚯蚓六つ螻蛄三つ五倍子各大に味粉末

酒にてくらに大湯に貼てよくよし　同

又方　蚯蚓土をさらり焼て乳香等分粉にして二分五厘づゝ紙に

撚て大きさ如燭火にして烟を鼻に吹て嚏　同

卒に頭痛つよくするに

皂莢の穀を粉にして鼻に吹いれ嚏いでて愈べし　同

又方　白殭蚕を粉末にして二度湯にて飲てよし　肘後備急方

又方　烏梅三十塩一匁八分酒七合半に煮て濃を去いろ〳〵を

飲て吐べし　同

風気の頭痛に

薄荷葉三枚づゝ毎日食後に嚙べし　千金簡易方

又方　川烏頭天南星等分粉にして葱白を搗てねりこぼし右

二味の粉をいれ研まぜてくすべし　本草綱目

又方　蔓荊子二合半を粗末にして酒二升五合にて浸すこと七

日にして毎日のむべし　千金簡易方

又方　烏頭皮を煎じつめて搗たるを搗たるに加いれてくすべし

松の布ぶくろにつけ頭痛する所に貼てよし　同

又方菊花石膏川芎等分粉末一匁ずつ桑湯にて
用ゆ　本草綱目
風眩頭痛すること
芭蕉の根を搗くべし　同
又方蕓麻子を油紙にかぶせ大陽に炙てよし　同
又方吳茱萸を水にて煮汁を布にひたして頭痛を
ふせぐべし　同
胸膈に痰あつまり頭痛する
米泔にて煮て黄おのく飲べし　肘後備急方
又方附子を紙にくるみて紙ごと熱灰に入炮して二分釜
脚墨四分二味粉末にして一匁づつ冷水にて痰を
吐く飲べし　本草綱目　附子の事製法の所にあり
又方山梔子を粉末にして蜜にて練り舌のうへにぬりつけ
吐べし痰を吐く飲べし　肘後備急方
又方湯一升に一升をもり加さまぜ塩三合いれ冷れば飲べ
し痰を吐く飲べし　肘後備急方
風痰にて頭痛もしくは又は手足しびれ動かざる
苦瓠の内の汁をとり牛の乳汁の孔に灌るれば腦に動ぐ
もしくは絶汗もその毒飲べし　肘後備急方
瓠ずくいを細粉にして吹入てよし　本草綱目
頭風眩暈をもつて
雞冠血酒にて煮て飲べし　衛生易簡方
又方蟬脱を炒粉にして一匁づつ温酒にて用ゆ　肘後備急方
又方白芷を粉にして蜜にて練て丸じ茶湯にて用ゆ　本草綱目
荊芥の煎湯にて用ゆ　本草綱目

又方　川芎烏薬等分粉末　二匁生姜湯にて用ゆ　傳信尤易方

酒熱にて暈つよく引ふ

又方　茯苓酒にかきまぜ炒粉末　茶湯にて用ゆ　本草綱目

風涎のさなどにて附けをかしもぐるにより眩暈つよく肉

眼くらむ

牡蛎を粉末　黄芪ふかく炒防風白茯苓等分粉末にして

二匁づつ酒ふいまき飲くらう　又い飲のらう湯にて飲もよし

日に二三度づつ用てよし　傳信尤易方

偏頭痛　右もかくのごとく眩暈せるなり

川芎をこまぎこと酒にて毎日三度飲のもよし　肘後備急方

又方　雄黄細辛等分粉ふしたのうち痛む方の鼻の孔へ吹いる

べし　右のうちいづれにてもよし　同

又方　藁撥灰粉末　高人の鼻に湯をかけまぜ左の眩暈

ふいたの鼻乃孔へ吹いるべし　左の孔へ吹いるべし　同

又方　穀精草灰粉末　麪粉ご同じくあにおしまぜ紙ふ

つけ眩暈の所ふ拭くよし　同

又方　蘿蔔の汁を搾りうる蜆殼を一つ仰向きて鼻の

中へそそぎいるしば須臾まして倒るなり　両方眩暈す分

まもよし　本草綱目

頭痛年久しきに

白芷を粉末にして茶にて用ゆ　衆妙方

又方　蘿蔔子生姜等分搗くけを搾りうる麝香の粉少

ぞくいまかきまぜ鼻乃内へそそぎいれよし　同

又方　草烏頭尖一分赤小豆二十五粒麝香二分又歯七三味

粉末にして五分づつ落葵湯にて用ゆ　葵湯は次を

用てよし　一并に右の薬を鼻中へそゝぎいるべし　同
又方　楊梅の皮をあらまくもえじ　二三度さゝうの用てよし　同
又方　蜂脫を炒粉まくふくらつて温る酒あまく飲べし
よし　彙聚單方

又方　蕎麥粉五合ゑまくに移り二つの餅とし　瓶の上におく
餅二つ紙をかへおけば乾よるを汗出さく　ゆるなり頭冷ること甚
さらに用てよし　本草綱目

頭腦の中時々ぐき出のかむがごとくなるに
菜子を紙粉まくまくに鼻の中へ吹いるべし　同

頭腦ゑまくに小眉のあらう痛つよくなる
穀精草二文　蝦蟆　三文　乳香一文　右之味粉まくまくに吹ぐづ
火丸焼まくまくに綿に嗅まくよう　同
鼻痛目につゝなりいるむに

大なる附子一つ炮まくまくに皮紙けづりさり粉まくまく　生姜十文
黑豆半合　炒右二味紙酒まくまくて　熨じ　漬をさり　赤の附子の粉に
を一文いまかさまぜ用ゆ　同　附子の事　製法のこと有り
又方　荊芥　細辛　川芎　等分粉まくまく一文づゝ食後に白湯
にて用ゆ　彙聚單方

眉稜骨つよく痛まく紙ぐてきに
羌活　防風　各一文づゝ　甘草　夏は生ぶまく多い多くて一分水
まく　熨じ用ゆ　但し夏は芎藭　紙酒ふかさまぜ炒加まくよし
冬は加ふべからず　赤有く痛　生姜ふかくよう　治法彙
雷頭風は眉痛まくまくに頭癰のごとく腫おこり　腦の中時々
出まくまくに先ごとくなるに
地膚子　生姜　おなじく搗まくまくに　煮まく極熱し　酒一盃乃
うちへいまく飲べし　汗出まく　飲べし　本草綱目

腎虚して腰痛もるに
硫黄を粉末にして塩こもるまで生麦糊にまぜて梅の大さに
丸じて十粒づつ蒲椅の黄湯にて用ゆ同
又方硫黄六匁烏薬四匁粉末にして餅糊にまぜて梅の大さに丸
じて十粒づつ食後に茶湯にて用ゆ同
傷寒腰痛破るがごとくなるに
葱の白根八匁生姜一匁水にて煎じ用ゆ同
腰痛をぐるぐるとして出ざるに
淡竹葉一握を煎じ用ゆ衛生易簡方
腰痛熱あるに口乾き小便赤くちぶるに
蜂房を炙りて一匁二分水六貫に二盃入れ八分めに煎じ二度
小用ゆ同
腰痛止まるよ

瓜蔕を粉末にして二分程鼻の中へ吹入べし口ふ治あり合
まぜて右の方に用ゆるなり苦水にて吹べし本草綱目
風ふるうて腰痛もるに
蓼薺子を煎じてつぶして湯にひたして汁を去りうつ
ひたすらうつべし同
又方葡萄根一合酒一合いれ煎じ飲べし汗出て治べし同
又方川芎一匁茱萸二匁水六貫に二盃いれ一盃に煎じつめ
毎日飲てよし同
気欝の頭痛ふ
香附子を炒て軍匁川芎二十匁粉末にして一匁づつ煎湯に
て月に三度用ゆれば腰痛の根ねのごとき風をあらかた
す同
血血吐血下血などの後眩暈もるふ

川芎當帰酒ニ浸シ一二味等分ニシテ一夜水天目ニ一盃入セ湯ニ煎シ飲ベシ　衛生易簡方

八味丸加ヘテ用ヒテ　附子の事　製法の事あり

酒を飲て後腹痛するに

竹茹二十匁水一升二合ニ入レ七合ニ煮つめて角ヘ籠子を三ついれ煮て熱ウ飲ベシ　本草綱目

須臾風ヲ引テ腹ウごくに

大黄芒硝各粉ス・井底の泥ニ和シ腹ニ塗ル　衛生易簡方

天ヒキツリ或ハ面ヨリ風ヲ出シなどする時腹痛おこるに

桂心の粉を酒ニ調ノ頂の上并ニ額角ニ傅ベシ　千金簡易方

白屑

頭ヨリ白屑出来るに

雞蘇を水ニて煮テ用ヒテ　或ハ焼灰ニシテ傅ベシ

本草綱目

又方牛蒡の葉を搗て汁を取り煮て汁を取り明礬ヲ少シ入レ皂莢を水ニ浸シ煎て右の汁ニ塗ベシ　同

蒡の汁をあらし去ベシ　同

又方桑の木を焼灰ニシテ湯ニ入レかさ交頂実洗シ去ベシ　同

又方蚕沙を焼灰ニシテ水ニ入レかさ中ヘ滴を去リ去て洗ベシ　同

又方蚕下の烏鶏の糞子三つ有ヲ搗て熱湯一升の中ヘ入レ搗て熱ク洗ベシ　但シ一升を二度ニ用ヒテ洗ベシ　同

頭ヨリ白光を出すに

紫草茸水ニ煮テ用ヒテ洗ベシ　本草綱目

又方　塩湯にて洗あらい芋の葉を焼灰にして傅くよし　同
又方　蒜をきりその切口にて白光になりてよし　同
又方　貫衆の根を焼灰にして塗くよし　同
又方　楝樹の皮或い枝を焼灰にして猪の脂にて練り傅てよし　同
又方　後子麦に殼を去胡の搗て敷くるか胡麻油にてやはらげ傅べし　千金方
又方　布にて白光を出し赤くし羊脂にて研三年弱に
てらし塗てよし　肘後備急方
白光にて髪抜て生ざるに
麻仁を炒こがし研つぶし猪の脂にてらし塗てよし　本草綱目
又方　生油水に多くかきまぜ毎日ぬりてよし　同
又方　臘月の猪乃屎を焼灰にして傅てよし　同
頭禿

頭禿は頭皮の大さ銭ほどにもげて髪抜ざる様いふ
蕪菁の子を研つぶし醋にてらし一日に三度づつ傅てよし　本草綱目
又方　白頭翁の根を搗くだらし傅べし一夜ばかりにて痛拍の
ごとくなるなり十日五日ばかり付て金方なり　同
又方　生蠟を湯にとりに塗くよし　見にあらざれども久しく
髪生ずるなり　同
又方　黄蜀葵を大黄黄芩等分に粉にして先米汁にて洗て
あらいて後右の粉を生油にてこねて塗くよし　同
又方　桑の木を焼灰にして水にとりて髪をあらい桑椹を
もりつけて日中に洗さらし睡くよし　千金簡易方

頭瘡

疥の種拍
湯小猪を刺して腫拍あらい而第葉より粉かをうけ

生油ふくこと紙塗てよし　本草綱目
又方鶏子殻を焼く粉にし生油ときぬてとき付くべし　同
又方胡麻灰麝つけてよし　同
又方白礬を粉ふり酒ときぬてとき傅くべし　肘後備急方
又方黄連赤小豆等分粉めし猪の脂ときぬてとき塗くべし　十便良方
頭瘡痒こと甚しきに
楸葉を搗き汁をぬりてよし　彙聚單方
瘡痒して細かに出来るに
白き鴿の屎を研て黄研つぶし傅くべし　本草綱目
小児頭の瘡
鶏子の殻よく焼て黄研て白きを去て殻ばかり粉ぶ油あり
なりその油に種粉ぬ生油ぬりて瘡に傅くべし　同

又方糯米飯を焼灰にし粉ぬりつれ生油ときぬ
付くべし　同
又方黒豆紙炒粉にし水にてとき付べし　同
又方田螺の殻を焼粉めし生油にてとき傅てよし　同
又方蓼の根紙研細ふ蜜并に雞子白にてとき塗べ
瘡の内より出来て愈なり　同
又方胡桃の内うち皮紙むきさり炒の上にて焼粉にし種
粉ぬりいれ生油にてとき付てよし　同
又方杏仁を焼研つぶし傅てよし　同
又方葱の汁にてとき傅てよし　同
小児頭の瘡膿ある紙出し磨てまき出来るに
黄連十匁胡粉三匁甘草二分三味粉めし猪の脂ぬく
ら紙付てよし　十便良方

小児疳の疳虫に腸いたく夜ハ口あさぐるに
鄰魚ちさ二三枚なるを腸をさり去の附子一ツ皮と
腸ともに共に去粉ともし大の鄰の腹又縛く多り煎し搗爛し
疳虫に付べし　ちよ蒜汁蓋あたゝよし　本草綱目

小児の疳一ぬんは癍あまうるに
雀卵殼をくゞさ猪の油ふくかさまぜ傳へし　傳信尤易方

小ふ軟癤出来るに
蝦蟇の皮を剥て貼べし　本草綱目

又方胡麻油にこがし塗べし
又方芋茎にてもして傳べし　同

又方冬まゝくあたゝりうる桃実油にて粉ともして生油にて
ちさ付くよし　衛生易簡方

又方桑螵蛸焼粉ともして生油にて傳てよし　本草綱目

頭面腫

風邪にあらず頭面腫るゝ
杏仁を搗膏のごとくして傳くよし又ハ杏仁六七ちさまぜて水
にて煎あらゝ洗いつるとも三度ばかり
して愈なり　肘後備急方

髪

髪ぬけて生さるに傳くよし　本草綱目

甜瓜の葉を搗汁をうに傳てよ　肘後備急方

又方側柏葉を陰かしてよく粉ともして油にて傳てよ
又方麻子三升山椒二合米泔小ちて一夜澤をさるを
けて毎日洗て洗ふべし一月ばかり洗てよし　同

又方桑白皮をこまぎみあるく黄土六度ばかり沸して澤
にて髪をあらふべし　同

又方　麻子と白桐葉とを共に米泔にて煮五六度程煎て濾
をとりけして洗くすべし　同

小児乳より髮生ざるに
椒葉を搗けをすり傅くすべし　千金簡易方

又方　鄙魚を焼灰にして筋ふくとさつけくすべし　同

髮生ずるを生ずるを生ずるふ
桑葉と麻葉と同ぶく米泔にて煮髮を七度ばかり洗ふ
べし　本草綱目

又方　蔓荊子二分附子二つ搗ぐき酒二升八合の内ふくき壺の
中ふくを封じ十日目ばかり先度けずく
髮ばかりくはけくすべし　黒さ鶏の肪を一日に二遍ぬく
髮小塗七日程塗くすべし　毎日二度遍て付べし　四十日程
中に髮甚生ずるなり但し髮ばかりくはんさ切ふくだるり塗

へ〜外の和くいつくべるべし　肘後備急方

又方　桑の葉を生ずと水とふくく煮じ濾をけるべく髮
ばかりくふべし　本草綱目

髮を拔ざるを生ずるに
榧子三つ胡桃二つ例の葉十文円じく搗き水をふくく
おさをふくくるべく髮ばかりくはんば髮自拔ずけど同

髮ばかりくはんく
酸漿草を水にくく煮黒豆椿実子をいまふくくび煮をけるく
髮ばかりくはんべし　碎金方

又方　酸石榴五倍子芝麻葉ばかりを杵臼に入鐵の器に
いれるに煮くくわさ髮小ぬりくすべし　衛生易簡方

又方　自然の乱髮ばかりくはんくるい十文山椒子粒左器小れば汁
まで塗封じ火の中にいまを煆ふくし研細くして一文酒

まて煎べし　同

又方　胡桃仁の皮科蚪こ等分搗てらし髮にぬりて上　本草綱目

又方　桑葉を紙に油まてく煎じ髮紙浸してくよし　同

年わらの髮白きを黑くまてに

髮紙よりあしいて灰胡粉等分醋ふかさまぜ煮あてめ夜寢る間

小髮にぬり油紙まてく髮紙つゝをくべし明日ふいてり髮紙洗

ひくよし　肘後備急方

又方　白髮を拔さりをを毛の孔へ白蜜を塗てくよし髮をも

生ずゝ柘ば榴子紙搗けをこり塗てくよし　同

又方　黑く艶しこう紫稚百文科蚪百文孤ふいまを紙にくく封

し家の東向の取て玉べし百日かどるをく用れば泥乃

ごとくなりこう紙髮ふ塗てくよし　本草綱目

又方　胡桃をもりつぶし白髮を拔さりをを毛の孔の中へ

もりこめば黑き髮生ずなり　彙聚單方

髮脂に

百草膏を粉にし髮にぬり一夜おき明日に髮紙搗て上　本草綱目

又方　鷄子の白を紙にぬり髮にぬりもぞくありて洗ちべし

髮塀おちをくこうるを元あるものなり　同

髮のうこ抜をくうるかいざるに

木瓜を生油まてく浸し髮ふたけ搗てくよし　同

髮をあらいて番ちくまてに

雞糞をあらに煎じ髮を洗ふてよし　同

髮を風出て去ぐうを記て

菊の葉を搗湯まてひたし硼砂紙かまぜ髮ふけ布をて

陽を包ぶべし二夜ばかりまて搗紙のそくべし　彙聚單方

又方　水硼を懸まりてのゝ髮ふぬりてよし　本草綱目

又方　硫砒を研ふるさ　そそけを梳ぬくと　毎日髪を梳てよし　同

頸項

項こうろ　名加へ　をことなしざるう

大豆を蒸ろ　麥ら　しめ袋の中にいれ枕とすべし　本草綱目

又方　附子　炮　きざむ　一文山椒十粒　一粒づつに白麥を

つめ生姜二片を天月に一盃すいし一盃すい煎じつめ空腹

にのむべし　同　附子の手製法の所にあり

面之部

面大小腫瘍うに

蝼蛄を一つかし乾し粉二匁蜜を一味粉とし　ちゆ汁

毎朝に吸べし　茅の根　煎じ　本草綱目

風熱して腫瘍うに

緑瓜を焼粉にしみそに塗べし　同

又方　赤小豆の粉を研そそつけてよし　救急易方

頤頬腫瘍く　赤小豆の粉を蜜にて塗てよし　本草綱目

耳腫なるにより喉のわるうまで腫るう

蝸牛を出しつぶし　熱かさまぜ傅べし　同

面の腫脹つるに赤癍といふ

瓜蔕を磨ふくとき傅べし　同

又方　赤小豆の粉を鶏子の白にまぜて塗べし　衛生易簡方

項ようう類一かけ　ハよ腫るうを蝦蟇瘟といふ

側柏葉を搗　汁にて蚯蚓の後の角　泥をとき塗てよし　本草綱目

面小粉刺あまうに

馬齒莧を搗うべ　黄じあるべし　同

又方　黒牽牛子成粉末　小豆の粉とまぜ　袋に入れ毎日
面に付べし　同
又方　鶏子の白を二度醋の中へ入れ　三日すぎて　綿子
の白をひたし面へ塗べし　肘後備急方
又方　浮萍を搗面にぬり　乾かむる飲べし　肘後備急方
又方　茨連　牡蠣粉　等分　水にて練り　面へぬりてよし　得効方
又方　白礬の粉　酒にてとき　面に塗べし
蛇脫皮　焼て　瘡をまぶすこと　数度すべし　大の蛇成　牽牛の
中へ　まぶべし　肘後備急方
又方　蒼朮　厚朴　陳皮等分　甘草少し　いれ粉末　水にてとき
ぬりてよし　同
又方　茨連　茨藜　胡粉等分　粉末　水にてとき　ぬるべし　同

又方　鹿角末を　麝粉　酒にてとき　ぬりてよし　本草綱目
面小悪瘡出来るに
柳の葉或は柳木皮　とりて　黄じ　焼かたり入れ　ぬるに
洗べしよし　同
又方　綿　絹　湯にひたし　瘡の上を搨ること　度々　金創なり　同
又方　胡麻をかゝ付べし　同
小児面に瘡成て　火のごとく　赤し
茨梁米を粉にし　小蜜をかさまぜ　右の粉を　ぬり傅べし　或
綿子白成　加傅　尤よし　衛生易簡方
小児頭面に瘡成て　水出て　やまず　痒こと　甚だ　詩瘡といふ
蛇床子十文　粉末　又粉末　生油にてとき　付べし　本草綱目
面小雀斑出来るに
黒牽牛子を粉にし　綿子に　白ときて　夜寢る時　面に塗

咽物わるいおうたべし　同

又方　李の核をおろしさに仁を研つぶし黏子丸白こまかに
塗明礬酢にて研まして洗い去胡粉を塗るべし　右の方を五六日
用ゆべし雀斑盆のなりたる内風にあたるべし　同

又方　山茱萸の根にて粉にして夜寝ぬまに頭にぬり明朝
洗おとすべし　同

又方　桃花と冬瓜の仁と等分研粉にして蜜にて丸傳べし　同

又方　白茯苓の粉を蜜にてときて薄く傳べし　二遍ばかりに
ちゝく急べし　同

又方　蕪菁子を研てぬらし傳べし　肘後備急方

眉毛脱おちたるに
蕪菁の子を炒研細にして醋にてうさ塗べし　本草綱目

又方　側柏葉百六十文附子二十文ともに去皮ともに粉にし

猪脂にて練り三十丸にして毎日一丸を米泔の中ふかに研べ
きこしをけすべし　眉をあらひてぬるべし　十便良方

おとゝいのつゝいをけをとかしてらざるを解頤とす

南星を粉にして生姜汁にまぜてこれを顔車にぬり一夜にして頤
なのごとくかるべし　本草綱目

又方　酒を多く飲まゝ大小醉にして睡るに附皂莢を粉にして鼻に吹
こゝ嚏あればこれ初のごとくかるべし　治法彙

眼目之部

眼赤く腫いたむ

三七の根を搗て汁をこゝろ眼のまゝに塗べし　本草綱目

又方　自分の小便をもたゝうけて目を洗べし　同

ふるゝと熱散き痛やむべし　同

又方　蓮子二三合を十袋に袋して沸湯の中へいれ蒸て乾
かし別に煎べし　同
又方　古錢を焼かきりつく粉末を作けをり錢のうちより出す
目の中へ赤くいたれば涙あるく食べし　同
又方　決明子を炒研て粉末にし粟湯にてうれた大腸に付べし乾
ば数度も傳へくすり　同
目卒に赤く痛むに
甘草　細辛　黄連　各ひとつづ　塩ひとつ　水一盃まして煎じ一盃
に煎じつめ目を洗へし風なれば洗ふべし　十便良方
又方　牡蠣皮百六十文　二升　各二合まして煎つめ塩ひと
つ　再び煎じ二合ばかりに煎つめ眼ふつけをくすり　衛生易簡方
目ただちに赤くなる

大なる田螺　水の内へ入れ清き水の内へ入れ清き水にて
田螺のはをあけをくすり　本草綱目
うり目にさしをくすり
又方　當歸　紫草　黄連　各ひとつ　熱の水にて煎じ清つ
搽しうるけて眼を洗ふべし　肘後備急方
又方　艾葉　燒灰　二文　黄連の粉　二文　古錢　一文　茶碗小
いに沸湯をいれかきまぜたるを　古錢をくだくこと
古錢にてこれを眼に滴すべし　衛生易簡方
又方　猴雪草を水にて研ぐ
すり　景聚單方
又方　凌霄花　山梔子　各ひとつ　粉にして一文つ食後に粟湯に
て朝日日に二度づつ飲べしすり　同

小児目のうち赤きに
淡竹を火にてあぶり油紙にうけ目に熨すべし　本草綱目
又方黄連を粉にしあまそにて目の心ぬりてよし　同
目のうちいたむに
鶏子殻にて一方破りて黄を出し殻にうすき紙にて
紙にて封じ大なる蒸蔔に孔をこしらへ右殻
鶏子をいれ孔をふさぎ固く封じて土にて煨をくべ蒸
蔔の盛にて大のごとく煨をこき薬蔔のごとく出来るを用て玉し
入をこしらへ鶏子殻白き紙目に熨すべし加減をこしらへをきて
用る　衛生易簡方
又方防風五倍子等分水に煎じ煮きりに目に洗ひよし　同
目いたむこと粉甚だ益さるに
海蠃の肉乃けをうり目に和してよし或は黄連の粉を蠃

の肉いきけをとり目に點じてよし　本草綱目
肥うる人風熱上に昇さかり眼つよくいたむに
防風羌活荊芥茺蔚子酒にかさねて蒸し味等分水に煎じ
用る　治法彙
又方槐角茺蔚子木賊蒺藜等分粉にして薄き茶湯にて用る　同
睛つよくいたむに
防風を酒にて三日ひたしてかわかし乾して粉にして一匁
づつ温うる酒にて用る　本草綱目
又方香附子紙童便にてわたし乾かして六十匁裏相等
十匁粉にして一匁づつ茶後に用るすき茶湯にて用る　治法彙
目のうち赤くいたむに
朴硝の粉を車前子の煎じうけて目を眼胞に塗り明礬洗ひ
おとすべし　本草綱目

又方 赤小豆南星粉末 生姜汁 右共に和して陽に炙て用ゆ 衛生易簡方

又方 芡連二分 竹瀝 苦竹瀝一合の内へひたし一夜をき

くを竹瀝を煎て用ゆ 同

外り 漢聚單方

又方 芡蓮 燒灰 右共二分 芡蓮二分 水五分 煎

龍腦少し入 温ふし洗のくよし 本草綱目

又方 梔子二つ 白樂豆の大さ 右共に湯に煎用 治法彙

分 右の内へ浸と一時 右共に湯に煎用 治法彙

又方 蕺菜 芡蓮粉末 綿子白 右共に煎て其の上澄を用ふ

除ちくよし 或はあらくくるとよし 同

卒に目赤くいたむ

苦竹を三寸 右方節を去て一方の節に孔をあけ芡蓮を入れ

紙にて上を封つて井の中へ浸ること一夜 竹

乃器の中にいれるあを紙にて封じ 并に龍腦を水へおいれ

目をあらふよし 本草綱目

眼卒に痒くいたむ

芡蓮を乳にひたし目がしらに點ずよし 同

眼卒に赤くあらいたむ

菊を根ともに搗て汁をとりて目にさすよし 同

又方 蕺菜の根を搗て汁をとる目の中へさしいれよし 同

又方 青布を炭火にあぶり熱目を熨べし 并に大豆を蒸て

囊に入れ枕にしてよし 同

風熱にて目ちりいたみあるに

車前子 芡蓮 等分 粉末にして一匁づ食後に温酒にて用ふ

毎日に二度づ用てよし 同

暴発して紅肉赤筋目ちがるに

龍胆の根の搾汁一合ばかり蔓連城の根をひたすこと
を一昼夜ばかりさまぜ目ふ拭ひ
爛弦風眼　目ぶち腫れ膏肉いでて痛甚しきなり
五味子　蔓荊子　茯苓　菊　蕚　各等分
又方　倍子　銅青　白堊等分　粉末　熱湯ふいき目を閉て洗ふ
べし　冷れば煎じ直すべし　同
又方　焰硝　粉末　湯　泡ぶて湯をさり香油を拌ぜ右の
焰硝の粉を研まぜ皂莢子の大さ程に丸ずして一粒清水に化る
ほどをもつて目を洗ふべし　同
又方　白堊　銅青　五倍子　粉末　湯ふりかけて洗ふべし　同
又方　鶏冠血をさし　目に塗ずべし　同
風眼痛いむを
鶏子の白皮　枸杞の白皮　各等分　粉末　鼻の中へ吹いるべし

目に毒物吹入べし　同
眼赤く腫れたるに
塩　白礬　各等分　瓦の上に置て焼赤くし　柔碗に納め
綿のかるく被せ上に置て上に水を注ぎ汁を絞り
日に三度洗ふべし　千金簡易方
又方　黄連　淡竹葉　各一文　桐樹皮二文　水二盃にて煎じ盃に
煎つめ洗ふべし　衛生易簡方
又方　大なる生姜　皮二つ　部内の泥をこしらへ桐青皮にて
前のごとく紫になるまで煎じ金箔線にて三度
巻て包泥の中へいれ炮やくこと二時ばかり冷まして
しぼり出し　生姜を去て青皮研細末し先湯にて目を洗ふべし
茯苓　蔓荊子　各等分　水ふ煎じ熱さ
又方　又倍子　蛇床　各等分　粉末

うちにわらのしくらう　得効方

又方　蕎麥灰淋けてあらのしくらう　同

眼脂赤く痛いてくつく熱もちたに

細のまびをとり水にとくらた椀のうちへ塗火の上にかけ艾葉を火

ふくべ焼き細りてふまべかりくし　術のまびをこそげおとして眼

脂よりてうし　本草綱目

又方　貝殼をしくこぢ熱湯にてくさりにあらのしくらう　かゐ

らん貝をふくさて洗ふ　ぬりあり　或八藩防風荊芥を水に

煮しあらのしくらう　同

又方　薄荷を生姜けふいたこと一夜ふしてとくとしかうし

粉ふとく一夜絞ふつく熱湯ふいれ貝殼あらのしくらう　同

目あら赤く痛くれ目のうち蛞肉出ていてつよ絞ふ

大なる田螺七つくあらひ清さまの内ふいれ粉を吐せ

ル出し　田螺の殼あくさたる所へ塩をおしいれ粉を殼を

おてこさけをとり貝に延ばしくしうし　同

又方　梨一顆を搗け汁絞ちぬり黄連一ゑを細ふつくこ右乃

梨のけ汁をとり　仰向く貝に延ばしてとり　同

眼熱し　目赤く眼の中赤和を生じ蛞肉いで痛出つよ絞て

大麥十度と換ふ　ふとり肉だうり元黄連二ヶ文毛を去てこさぎ

こ淡竹葉文ふりさぎみ先竹葉ふ絞水五合入て煮じ二合半

ふ煮つもきく串し黄連と絞いを煮じ一合ふ煮つもを汁

を絞ふひしり貝ふ延ばしくしうし　十便良方

眼の中に蛞肉絞生じ

野蒜を絞ふいれ枕にしてとり　救急易方

又方　貝殼を焼く粉ふ　真珠等ふ同じく研く玉極め

細末にし蛞肉の上に付くとり　又方　直傳べし　治法彙

貝ん蛤肉を生じ　或い痒く或いしてこ漸くに瞳板さへざるふ
杏仁皮を去二ヶ月ふ輕粉ふるもりまぜ絡ふつて湯ふん
ゑ　同ふ塗むべし　本草綱目
又方　貝母丁香等分粉ゑ　乳汁にてうき貝ん點ぎそ　同
又方　浮萍ゆし　研ぐらし　鵝腦ゆぞりいまを研まぜ貝ん
塗じてよし　同
つき貝かどうく蛤肉成生じ　いるむふ
杏仁皮をさり研つぶし　乳汁にてうに絡ふひて　貝ゑ
塗じてよし　同
又方　地膚の苗并ふ葉成ふ少葉じ　貝をあらひそ　同
又方　地膚草を搾けを点ぎそ　貝成あるむて　同
眼ふ翳膜を生じ　うん
東向の壁の土をさり粉ふ毎日貝ん付づきそ　涙出て

命べし　同
又方　生ゑる蝸牛一つ　搗原砂少し　いを搗ふ　仁成ふ
沸ゑてさけを絡ゑ浸し　貝ん付てよし　同
又方　枸杞の子成　搗けを去ぎそ　毎日貝ん度づ　貝の中
へさしてよし　同
又方　瓜蔕子五ヶ　ふくく黄じ　焼き紙の真中ゑ孔を穿
あけ　初の黄湯の上成おかし　孔ゑ　のる湯ゑて　眼成洗
度も蒸べし　救急易方
又方　石決明外の粗皮成　けづる　研細し　ふ飛し
眼ふ塗むべし　或い右の粉を水ふ　ゑ　眼を洗て　衛生易簡方
目翳膜を生じ　ちがりいてむる
枸杞葉二十ヶ　車前葉十ヶ　桑十ヶ　桑白皮　接桑葉　貝ん　ねて
を皮ふかけ一夜おき　右の葉ふ　のゑ　ゑ　かろくおし　けを

出し貝殼中より搗ぎくよう　十便良方

又方貝子十文焼灰　龍腦少ぎうもちまぜ用う

いれくよう　衛生易簡方

又方五倍子七分　蔓荊子一文　水天目に二盃入一盃ふ煎じ

つめ極〻こるけるまで服成あるいくよう　肘後備急方

瘡瘡目ふいろうに

乾柿を毎日食〻くよう　本草綱目

又方猪蹄爪甲を焼灰　生柿ハあ〻

湯ふひくて須臾澄〻こ

ろうて貝成法ふてうし　同

又方黄丹極粉ふ粉　少ぎうり耳の内へ吹いるべし

瘡瘡左の目へ入るる右の耳へ吹いれ

右なるべ左へ吹いれ

くよう　同

瘡瘡目にいり翳膜出来るに

兎屎成日にかし〻乾し粉ふ末ふて一文づ薬湯にて用ひ　同

又方小螺蛳を水ふ煮て常に食ふてよう　同

又方兎屎蟬蛻赤通甘草ふ末ふて蜜ふ度く練て　衆妙方

又方白菊花十文緑豆皮十文穀精草根成去十文ひらんふ

粉ふ〻二歳ばかりれ小豆ふ末目一文福ふ乾柿一つ生粟米泔

一椀いまぜ泔水のこるまで煮て茶成去柿を食ふべし　毎

日柿二つこるまで食ふてよう　治法彙

ほど用くよう

又方穀精草蛤粉ふ粉ふ一文　猪肝一つきりひらき

茶の茶成肉ふひ絲ふいまぜ汁の皮ふてつこ糸ふてまぜ

一椀の内ふ入くよう煮て服成蓋し少〻さめて温かる時

猪肝を三つ出し〻食ふべし　同

傷寒の後極毒目にいり翳膜出来るに

烏賊骨十匁粉末　龍腦少許いま研まぜ目ぐすりさす
　本草綱目

眼中赤して或いは白く赤き翳膜出来るに
雀の屎をうるほしうる乳にかきまぜ研細かく目ぐすり
さすべし　同

翳膜晴まかりうるに
菖蒲の根成擂けをもつてうるを業雀ふいまを熬て膏
目にさすべし　同

小児眼瘡翳膜出来或いは眼に大なり晴かたり
うるに
極上の塩あにと紀を用ひ炒成ひて目に塗ぶべし
毎日三五度塗ぶべし　同

眼まつさ花のやうなる物ちらめくに

黄菊花一つ山椒目成去て六十匁粉末　地黄の汁をかが
ましとり右の粉成和り大豆の大さ程に丸じ百粒づつ食後に
薬湯四五度　同
又方椒目炒て十匁蒼朮炒て二十匁粉末　磨てこきうる糊まく
和り胡椒の大さ程小丸じ一度に二十粒づつ茶湯四五度用ひ　得効方

目乃くらみうるに
山椒百六十匁炒　搗篩て宝花黄百六十匁搗篩
山椒の粉成和り餅のごとくしこの風のあるを加け塩干小絞き
うる対粉末　蜜にて丸じ百粒程づつ食後茶湯にて用ひ　千金備易方
又方椿子荊芥穂等分粉末　蜜にて丸じ十粒ばかりづつ食
はゝ高病の黄湯にて用ひ　備生易簡方
又方荊芥穂枸杞根皮椿実等分粉末　蜜にて和り胡椒
の大さに丸じ二十粒づつ食はゝ飯のうら湯にて用ひ　得効方

又方　銅青寒水石等分粉末　熱湯和丸如麻子大　空腹
温酒服　百丸　同

腎虚して目くらきに
沈香十匁　山椒目　牡蠣　物理をぐし　右十匁粉末　酒
糊にて梧子大豆の大さに丸じ　六十粒づつ空腹に塩湯にて
用ゆ　本草綱目

老さ不仕よくみえて年きさ不仕よくみえざるは腎虚の眼病なり
生地黄　焙　右等分　天門冬　右等分　右二十匁同粉末
にして蜜にて和し　胡椒の大さ程に丸じ　一度に百二十粒宜
後に塩湯あるく用ゆ　治法彙

目卒にくらくざるに
雄鼠胆　鯉魚胆を取り搗まぜ　けを去て目に点ず
べし　本草綱目

又方　英土よく洗いまかさして須臾おきて清しき水をもて
目をあらふべし　同

目のうち熱しして赤くなりくるしみあるに
地膚の苗并に茎葉黄じるけあて目をあらふべし　或ハ
生の地膚を搾けを点ずべし　同

又方　英連根水にて濃煎じ目にそそぎ注いてよし　衛生易簡方

又方　黄蘗粗皮をけづり去蜜少だりいれ炒あらく濃煎じ
つめ日夜目にあらいそそぎ　同

虚労にて目くらきに
三月に菖蒲の花を取り陰干しして粉末にして二匁づつ服
その水にて用ゆ　肘後備急方

熱病にて食を渡又辛味食せるにより目暗くみえざるに
鄉魚茹て食べし　本草綱目

眼涙いでて止ざるを

塩花少し目の中へさしてあらひ度く洗てよし　同

又方茨蓮を水にてあらひ目に洗て拭てよし　同

涙あく止ざる目をあらひ

乾姜を粉にして沸湯にてかきまぜ目に洗てよし　衛生易簡方

又方白き貝子一つ胡椒七粒同じく粉にして目にさしよし　同

目の内の附子目をあらひ

生の雞肝の葉を搗てぬらして目ふつけよし　本草綱目

肝臓虚して晴いたく冷て涙出て止ざるに

蓽茄茎を炙て香附子十文粉にして一文づつ薄湯にてふくめば涙あく止ざるを

茨蓮と槐樹白皮とを焼灰にして煮沸して洗ふべし　衛生易簡方

又方桑葉をもて蔽ひ目に洗ふべし

洗ひてよし　同

又方猪胆を絞て羊角を入て蕪子一つ粉にして一文づつ薄湯にて目にあらひてよし　本草綱目

又方生地茨二文当帰一分甘草少しさゝげて水に煎じ合て小匙得効方

目邪にして眼中冷る

石膏煆粉にして二文川芎二文甘草炙て粉にして一文づつ葱白の煎湯にて朝夕或は茶湯にても用ひて二度づつ

目をくらして涙あく止ざるを

目晴くして涙あく止ざるを　本草綱目

瘻盆子紙日に不〻乾〻搗絞ふつて乳けふひらこと
一対ぞうもつて目の中に點じ仰ぎべし三四日なほ點
ずしだ金べし　肘後備急方

雀目ハ昏ぐらくして目ろくざるもの
地膚の苗并小菓紙ふつて洗ひてよう〻又ハ生
の地膚を搾けを点ずりうる目をあらふてよう　本草綱目
又方雀の血紙ようり一日に二度づて目ふたくいまてよう　同
又方蒼朮を粉にして一匁づて湯にて用ゆ　衛生易簡方
又方黄蘗の粉少ぞうり津にて目ふ傅て水ゆく洗ふべ
し百日ぞうもて毎朝太のごとく用てよう　叶業雀目のふ
かざ〻ぞ平常用ひしバ一生目ハ昏ぐ　千金簡易方
又方鯉魚の胆或ハ脳紙搗〻て目にさしてよ　傳信尤易方
眼〻倒睫生じ〻うた

石蒲川芎等ふる粉にして病人の鼻にふくませおきたれ粉末
を鼻の中へ吹いるべし　本草綱目
右の眼ぬ〻べ右の鼻の孔へ吹いるべ
又方東樹針白芷青黛等ふる粉にして生病人の口にふくませ右
の目に倒睫あ〻ば鼻の左の孔へ右の粉末紙吹いるべ左ならば右
へ吹いるべし　同
又方倒睫を按ずり風紙つぶ〻ぞ血を目ふきてよう　六七
度ぞ〻てよう　同
年々〻く目ろくざるに
蔓藜子七月七日ふるう陰干めて搗粉にして一匁づて空腹
に水にて朝夕二度づて用てよう　同
又方白犬子紙生ぬ〻〻うる時卯時ぞ母犬の乳けをとり
ぬるうちに目ふ點ずてよう　同

一切の眼病年久しく癒がたきを紀よ
皂莢子一握冷水ふいまし研そぐべし　救急易方

右のけて眼があかいさるもよし
瞳人の上に血絡そこき翳膜を生じ
生地黄を搗けをとり粉にふ一匁宜しき程ものこそよし　千金方
又方生地黄を搗けをとり粉をもぜ膏のごとくし二寸
ばかりの綿をひろげ眼の上におおひてよし二度わどれば
よし　得効方

目脂の上下に粟粒のごときものの生じ漸くに大小なりて米粒
のごとくなり或いは白く強くいたむことなく痒くなりて食ら
大黄を熨斗ふいまし炮し牛蒡子一分炒甘草一分こなぎとし
てこれを水五合一盃まいし煎じ食後ふ用ふ　同
故なくして目睛たちまちわけあく垂さがり鼻ふいまし腐忠

びびくく或いは大便血出くいたむ或は肝脹という
羌活地黄をもて煎じ六七盃のごとくよし　本草綱目
又方沒石その水もて眼中に点ずるを換れば睛自
然となり麦門冬桑白皮山梔子仁の煎湯にいれ飲べし　得効方
諸人一等に目紙ひびくして辛く赤く腫いたむこと
枸杞の根四十匁を二升に合いまし煎じ二合まに煎つめ滓を
こし塩一匁いまかきまぜ目紙あらひてよし　本草綱目
婦人血目赤眼
烏賊骨二匁胡粉一匁粉にして一匁づつ熨湯にかきまぜ
あらふべし　同
目まぶちくして目紙ひびくことなくざるに
石決明の穀を熨斗ふいまし炮し搗ぐ紀菊花甘草
等こなし水にて煎じ飲べし　同

一切の眼病

耳塞をとり栗一粒程づゝ眼ふさゝてよし　同

一切内障の眼病に

慈姑茨菰　麦門冬　車前子　等分粉末の類目の中にいりうるに

衣魚を粉末にし乳汁にまぜ目の中ふ滴いれてよし　本草綱目

或い刻魚の粉を目にさすべし

又方　栗米七粒爵しでらしをけて目に覆ひてよし　同

又方　爪をとり細末にして津ふくめ目の中へさしてよし

蠶又は絲の類もてもおのづから一所へ聚て出るなり　同

又方　好墨研汁目の中へさせば蠶又は絲の類ともを

一所へ聚てあるなり　同

又方　新しき筆管ふひとり目ふ入てうゐ蠶をとりてよし　衛生易簡方

又方　炮筆管をそろ〳〵なづれば毛物筆管の毛を付て出る

なり　彙聚單方

稻麦などの芒目ふいりてあざるに

蓮藕を搗しでらしに絞ふつけ目に覆ひてよし　本草綱目

又方　大麦を煮てくさりけをけて目に覆ひてよし

麥の芒目ふいり

るに尤よし　同

又方　新しき布にて目を覆ひ糟槽をとゝ布のうへより刷べ

し芒布ふつきて出るなり　同

目の中へ蠶などいりてあゝ目の中ふ騒膜などに成生ずるふ

瞿麥子　乾姜　同じく炒粉にして二度づゝ目ふ

月に日に二度づゝ用ふ　同

目に物いりまるに

蕪菁子　茨精　等分同じく蒸て晒かはして又蒸ことに九度ほて

粉こ〻二匁づゝ白湯にて服す日に二度づゝ用ゆ

よし　同

又方　芒硝六匁　石膏三匁　合の中へいをかさねて煮こ〻

用ゆべしさるあて明なり　二月三日

二月八日　三月四日　四月五日　五月六日　六月七日　八月朔日

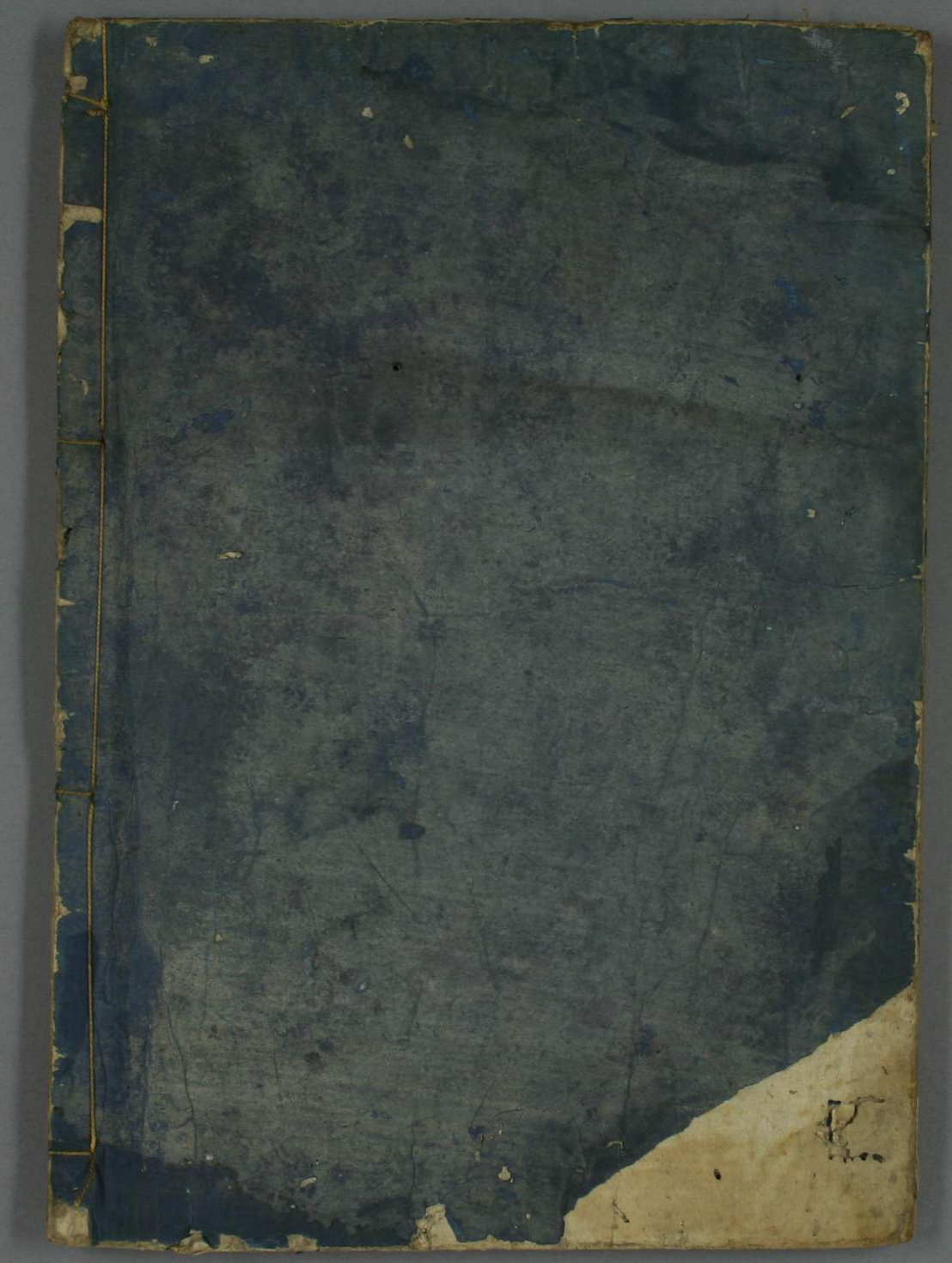
九月十二日　十月十三日　十一月十六日　十二月五日に用ゆべし　同

又方　蓽澄四匁　ちくぎこ　茯苓　ひしの実　かしの乾

しの粉　熟地黄　粉こ　二十匁　二味粉こ　酒糊にて丸り

大豆の大さに丸じ　六七十粒づつ温こる酒にて用ゆ日に三

度ゆゝ用ゆべし　同

普救類方巻之一上　畢

内閣文庫